



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第九十一号（毎月一日発行）

平成九年四月一日

## 北海の古平風土物語（五八）

### 荒れる冬の日本海 定期船で地獄の苦しみ

吉岡 橋 源 五口

昭和二年十一月のこと、

札幌の学校に進学していた私は、冬休みで帰省したが、その途中のことである。

この日の朝、雪が降っていたがあまり風もない札幌駅を出發して余市駅に着いた。当時、余

市駅前には古平・美國・横丹方面に向かう乗船客を、茂入の桟橋（船着き場）に運ぶ客馬そりがたくさん並んで待っていた。下車した人々は、馬そりの側に行つては、海の様子を聞いている。

「時化で一日欠航したが、今日は出ると言つていて」  
「これからでも間に合う急げば、これからでも間に合う  
というので、すすめられて馬そ

りに乗つた。  
黒川町から大川町を通ると、のれんや赤ちようぢんを下げておこわ（赤飯）・かん酒・煮しめなどを売る店が並んでいた。馬そりにゆられて茂入の桟橋に着いた。

まず乗船券を売つている小原回漕店に入った。茂入の岬から見たところでは海は相當に時化していて、余市湾内も大きくなうねりと、白波が見える。私は、これは難航しそうだと、危険さえ感じた。船の人は、

「天気も良くなつてくるつてい  
うから、出るぞ！ さあ早く乗れ——」  
とすすめる。

早く帰省したい一心で、七、八人の乗客にまじつて船に乗ることにした。定期船は末広丸といつて二十トソぐらいの小型木造船であるが、一時間程遅れて、十一時過ぎになつて茂入の桟橋を出航した。

末広丸は、大きなうねりと高波をかき分けるようにして余市港沖へと進んだ。この港を風波から守つてゐる、シリバ岬をかわすころから怒濤の荒海と変わつたのである。岸に高く切り立つた断崖絶壁はどす黒く、崖の裂け目はまるで地獄の洞門のよ

うに不気味に見えた。  
一時間ほども経つたろうか、やつと出足平（今の白石町）の沖を過ぎた。これからが一番の難所といわれるローソ岩にさしかかるのである。

青鬼の牙にも見えるローソク岩をかわす前後の二時間ほどは、猛烈な粉雪混じりの強風に叩かれて船は一進一退、荒波にほんろうされて、島泊（今の潮見町）の断崖近くに寄せられて行く。雪の吹きつける合間から地獄の入口のような崖が間近に見えてきた。

▼ケムニシクルのこと  
西蝦夷地マシケ領の支配人をしていた長三郎という者が、カムナクテというアイヌ人の話をあつた時彼が、北の方に赤気が見えるという。これをアイヌ語ではケム（血）ニシクル（雪）といつて、大変良くない運氣であるとされてい

て、その地方でウライケマがあるという。ウライケマとは死合といふことで、昔から必ずなにか大きな騒動が起ることといわれている。はたしてその翌年、予言したとおりクナシリ・メナシでアイヌの騒動が起き、和人が殺されるという事件があつた。（次ページ）

■小学生の作文から  
心配かけずに勉強

小学五年 坂本喜久恵

わたしたちは、ある日お父さんにおんないされて、こう内やせんこう場を見学しました。せんこう場はとつてもすごい音がして、がたがたゆれおちそうでした。話をしてくれるおじさんたちの声がぜんぜん聞こえません。

せんこう場からダイナマイトを使うところへ行きました。そこではさくがん機を使ってあなをあけていました。そして古島さんのおじさんが、ダイナマイトの中を見せてくださいました。色は黄色でした。それからこう内に入りました。こう内の話はお父さんやお母さんから聞いていましたが、行って見てびっくりしました。空気はおいしくないし、へんなにおいがするし、とてもくらい所でした。話よりずっとひどいのです。ここで働いている人たち、くら

—百年の歴史を閉じる—

# 稻倉石鉱山

(12)

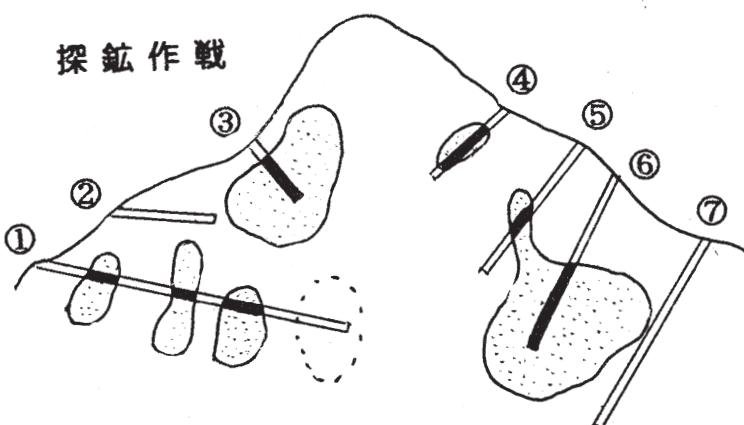
お父さんは、しんけいがつかれて帰つてくるのだから、そのままそつとねかせてあげたい。また会社へ行くときや、帰つてきたときは「行つていらっしゃい」「ごくろうさま」と、ひとことでもいつてあげる。そして、お父さんに心配をかけず勉強をしようと思いました。

いせまい所で、しかも地下三百五十メートルという危険な所で仕事をしているのです。お父さんはランプをたよりにしているので、消えた時のことを考えたらみぶるいがしてきました。

成因四十パーセント以上という良質の鉱石であった。このニュースはいち早く古平町内にも伝わり、当時の大きな話題となるほどであった。

井上光雄所長は新鉱床の発見を、融雪災害で活躍した稻倉石自治消防団や、決死の人命救助に当たった従業員の表彰伝達式と合わせ、祝賀会を開いてこの朗報を祝つた。

■融雪災害のあと的新鉱床発見に沸く昭和四十二年二月、鉱山が始まって以来といふ融雪災害を受けた稻倉石鉱山であつたが、災難のあとに朗報が伝えられた。新鉱脈を発見し、鉱山独特の「大直り」として鉱業所は歓声に包まれた。発見された鉱脈は大きなもので(富鉱体)、しかもバラ色のマンガン



- ◆当たり外れのあれこれ◆
- ①あると思ったのになかつた協力したアイヌの人たちによつて間もなく終わつた。
- ②もうひと押しがたりなくつて不発に終わつた
- ③すぐそこにあつたこれはすごいと思ったのにたいしたことがなかつた
- ④少ないのであきらめた
- ⑤見事に命中大成功!
- ⑥ちょっとのところで外れてこれは残念!

\* クナシリ・メナシの戦い アイヌと和人との戦いとして有名な、シャクシャインの戦い(一六六九)から百二十年後の寛政元年(一七八九)、場所請負人によるアイヌ人の酷使や賃金の不正な支払いなどに反抗して、クナシリ(国後)からメナシ(根室管内目梨郡)地方のアイヌの人たちが立ち上がつた。人数は百三十人ほどといわれ、場所請負人や番人、出稼ぎの漁夫など和人七十人余りが殺害された。

# 遙かなる故郷の思い出

## 古平の不思議？ ふしぎ！

[31]

橋 美義 春

No. 91

### — 第一話 —

#### ▼丸山岬の怖い崖の話

昔、丸山岬の鮫漁場があつた所に小樽水産高校の実習場が建つていて、そのすぐそばの船の上げ下場の左手に崖があるが、

その下を通る度に、子どもの頃から何となくいやな感じがしたものである。

その崖には縦に裂けたほら穴があり、そこから何かが飛び出しきそうな気がして、夕方など一人でそこを通る時には、ゴロタ石を飛び越えながら夢中で走つて帰つたものだ。いつたなんでどうなのか、自分でも分からぬ。誰かに自分の背中でもジーと見られているような気がし、思わず背中がゾクッとすることがある。不思議なもので、仲間といつしょのときはそんなことはない。これはいつたなんなのだろうか。

けてきたような気がする。幼い頃に祖母がこんな話をしていたような覚えがあり、落石事故で人が死んだ、おつかない場所だという潜在意識があつたからではないだろうか。

先日、『東京ふるびら会』の役員会で、雑談のときにこの話をしたら、幼なじみで同級生である青木美恵さん（旧姓佐々木）からこんな話を聞いた。

だいぶ昔の話になるが、あそこの崖の上から石が落ちてきて、新地町の斎藤六三商店の裏に住んでいたおばあさんの頭に当たり、そのおばあさんが死んだ場所だそうである。

私も、これで長い間の謎が解

お盆に帰省したとき、ビデオカメラを持って一番岩から二番岩、三番岩と撮影して歩いたが、なぜかあの崖だけは無意識に避けていた。七十歳をこえた今でもここはおつかない場所であり、私にとつては今なお不思議な思いのする崖なのである。



## 鮫大漁と戦争の一つの時代

竹内コト

『量りもっこ』

お金だと支払いが後になるばかりではなく、鮫の方がはるかに割が良かつたのです。

鮫で貰うときは、『量りもっこ』という特別のものではなか

『配給のうどん』

戰時中のことといえば、まず多くのは食糧難——腹をすかせながらやつとありついた食べ物、思い出すのはやっぱり？

『（次ページ下段へ続く）

- ・ いがべ = これでいいだろう、よくできたりう
- 「(仕事で) これでいがべ」 「これ いがべ」
- ・ いき、いき = 魚の鮮度、人の顔色など
- 「いきいい魚だ」 「いき悪い顔してる」
- ・ いぎなり、いぎなり = 急に、突然
- 「いぎなり出てきてぶつかつた」
- ・ いぐべ = 行こう
- ・ いさば (や) = 魚を売り歩く人
- 戦前は、魚を入れた籠を天びん棒でかついだ
- 何人もの浜のおばさんが、元気のいい売り声
- で、早朝、いきのよい魚を売り歩いていた。
- ・ いじくる = いじる、無駄なことよけいだと

## 古 平 の 方

(3)

- ・ いつべえ = 沢山、(酒などを) 一杯
- 「どんだら = からでいつべえやるが」
- ・ いすい = 窮屈、(服が) 体になじまない
- 「この服なんだがいすい(いすくらしい)」
- ・ うすつたら = 非常に、大変
- 「うすつたら大つきいまぐろ揚がつ咲ど」
- ・ うずげる = (子が親に) 甘える、女々しい
- 「ずんぶ(ずいぶん) うずげるガギだな」
- ・ うそこぐ = うそつき
- ・ うんすけ = うんと、大変
- 「あいつけ(を) うんすけやつつけでやつた」
- ・ うだで = 驚くほど、ひどく(非常に)、とても
- 「今日 うだで漁あつたど」
- ・ うま(つ) こ = お年玉
- 「うまっこ のせでやるが(くれてやるか)」
- ・ うめえ = (味) うまい、上手だ
- ・ ええべよ、ええべさ = いいだろう
- ・ えがつた = (これで) よかった、上手だった
- ・ えがべき = (ええべよ) より少していねい?
- ・ いちゃもん = もんく、いいがかり
- 「あの野郎! おれにいちゃもんつけた」
- ・ いちゃつく = 男女がなれなれしい
- 「あいつら いつまでいちゃついてるのよ」
- ・ いつぶく (ぐ) = ひと休み、休憩
- 「こじらで いつぶくするが」
- ・ えんかま = 海の中の掘れて深くなっている所
- 「あつこのえんかま きもち (気持ち) わり
- ど (悪いぞ)」

(前ページより続く)  
食べ物のことです。

ある時、珍しく干うどんが配給になるというので買いに行きましたが、うどんはごちそうでした。早速ゆでたところ、しが残っているようでよく煮えていません。それで少し長く煮たところ、今度はぶつぶつと細かく切れてしまいます。早くゆで上げると生臭くてとても食べられません。

あとから聞いた話では、何でもこのうどんは大豆粕を粉にして、それにでんぶんや少量の小麦粉を混せて、そして麺にしたのらしいということでした。食べてみたところ、うどんのようなるつるつるした感じがしないで、なんかボソボソしたものを受けた覚えがあります。でんぶん粕のだんごの方がまだ食べやすかつたようです。

当時のそんなことを思い出しながら、今の生活を考えるとまるで別世界です。



## す ば ら し い

## 國旗と國歌を崇敬

渡辺ハツエ

白地に赤く　日の丸染みて  
ああ美しや　日本の旗は  
朝日に昇る　勢い見せて  
ああ勇ましや日本の旗は

日本人から見れば、世界で一番輝いて見える日の丸の旗、そして、国歌『君が代』はなんとすばらしい歌でしょう。私も日本人としての誇りを持つて『日の丸』を仰ぎ、国歌を崇敬してまいりました。

かえるみるに、私の尋常高等小学校時代は祝日の儀式がありました。当時、低学年は四年生まで新地分教場に、五年生からは本校へ登校していました。

一月一日「四方拝」、二月十

一日「紀元節」、四月二十九日「天長節」、十一月三日「明治節」と、そのたびに本校で儀式が行われ、女生徒はえび茶の袴をはいて参列しました。

式場には紅白の幕を張りめぐ

らし、国旗を掲揚して、校長先生が教育勅語を奉読し、国歌を歌つて厳かに儀式が行われました。

今は時世もすっかり変わってしまい、このような儀式は廃絶されてしましました。祝日にも各家庭での国旗掲揚も見られなくなつて、寂しいかぎりです。

子どもたちは、自国の国歌を歌うこともあります。歌詞も

知らないのではないかと思います。日本の将来を担う前途ある子どもたちが、愛國心に燃えて

胸を張り、日本人の誇りを持つて『国旗』『君が代』を崇敬できるようになることを願っています。

二年ほど前のことだと思いますが新聞の投稿欄に、高校生からの「国旗・国歌に対するの主張」が載っていたのを読んだ記憶があります。彼の愛國心の現れに敬意を表しました。

◆丸山岬の崩れたがけ

松浦武四郎『丸山崎の図』

今から百四十年ほど前、当時の蝦夷地を六回にわたって調べて歩いた、有名な松浦武四郎と

いう人がおりますが、その探険

の様子を数多くの本にして残しています。それらの本の概要をまとめたものが『蝦夷日誌』と

してよく知られています。

その中でフルピラ「古平」のことが書かれていますが、書き直すと次のようなことです。

「訳すと、小さい山の崩れた所

■古平の地名

《6》

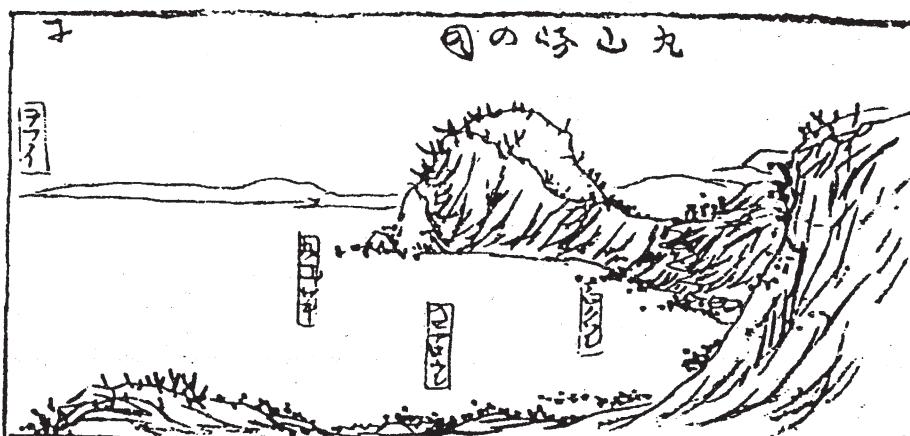
という意味だというが、そうだとすればここ丸山あたりの地名なのだろうか。アイヌの人のいうには、フウレビラというの

は赤い崩れたかけという意味で、それは古平川の南側の崩れたがけのことだという。そういう

われると、いかにもそのように思われる。それが今、この地の名前になっている

北側の海から見ると、丸山のがけの崩れた地形が古平の語源のようにも思われるのです。

□の中の文字は右から、白クツン、ヘロカロウシ、丸山サキ、ヲフイ、左上の字は子



短

歌

## 岬短歌会詠草

雪解けの小さき庭に色とりどりの背のびしてゐる若芽見えそむ

長崎フユ

玄関のガラス戸に粉雪吹きつきて短歌つくる午後の部屋暗くなる  
駒ヶ岳噴火に思ひ浮かぶ有珠山の降灰がわが町に及びしを

竹内コト

よろこびの娘の家より帰り来て妹に電話する声はずませ  
灯を連ね山下り来しスノーモービルわが庭先を忽ちよぎる

池田テル

ひと片のブラックチョコレート口に含み温めし牛乳を努力して飲む  
えのき味噌われの病に効ありと友は長野より取り寄せくれぬ

柳佳代

波きらら甥は電話の声弾ませ大学合格知らせてくるも

鈴木時子

春なれど錢函の海波荒れし番屋は深き雪に埋もれぬ

東美知

とよき十年前桜見むと友らとゆきし道を夫と駆りゆく赤松街道

菅原節子

蓬色恋ひて購ふ草しんこ余市迄出て帰途の土産に

堀典子

海沿を走る車に宵浅き港古平の町の灯見え初む

水口キエ

轟木富美子

金杉すみ

山口スエ

俳句  
吉平ホトトギス会

待望の道路貫通秋天下 越野清治  
桶の中つぶやく泡の蜆かな

冗談のはや見破られ四月馬鹿 齋藤波留

積丹の礁にゆるゝ新若布

冬めきて日本海の荒るゝ日々 仲谷美砂

除雪車の音より朝の始まりし

揚船の化粧直しや春隣 仲谷比呂子

日当たりて育ちの早き軒つらゝ

雪間草生命あふれている如く 福井幸平

昨日より青さ増しゆく雪間草

鰯場蟹茹で夕膳の整えり 大和田絵伊

通夜寒し無念無想にありにけり

炉話の弾む茶請けの鰯漬 大島喜恵

娘は嫁に籠を飾ることもなく

花便り心に在りし吉野山 山口浪  
年尾忌や小樽運河も歩きたく 定年の身軽になりて浴衣夫 水見句丈  
競べ菊老いの眼識問われけり 海猫さわぐすけそ好漁二三日 越野敏雄  
鶴や束の間鳴いて何処へゆく 少し癒え床に昼寝の出来る程 福井久美子  
冬木立空に編みゆく梢かな 一門の花型力士豆を撒く  
もの芽吹き久しかりけり薄化粧 アカシヤの香に誘われし夕散步 長谷川和子  
アカシヤの花盛りなる散歩道

## 古 平 の



福 井 幸 平

最近見た本に、商標、屋号のルーツ一〇〇選があった。専門家の書いた本だけになかなかおもしろい。

昔から醤油ならキッコーマンとか、酒のなんとか、花王石けん、デパートの商標など思い出したらきりがない程記憶に残っているものだ。

自分の小さな町でも気にもしないで使っていた。特に同じ名字の多い本間・佐藤・須貝・藤野・堀・鈴木・齊藤等々、電話帳見たつてわかるように、随分あるものだ。これも生活の知恵で便利に使つてた。今改めて考えてみると解らないことでも、先輩やいろいろなひとに尋ねてそのルーツらしきものも少しうつ勉強してみたい。

ランプや、あぶらや、どやさん(いかけ商売らしい)、花や、傘や、車や(佐藤さん)、タキリヤマニ権平さん、樺太ごんべ、あなカンダ、浜カンダ、沖村力ンダ(青森の蟹田村がなまつた

ものらしい)、ヰと書いてカギキと読ませ、更にキノコ音藤さん(江差の付近の村の名)、市

れはジガメイチ佐藤さんは解らぬままに今日まで来てしまった。ビヤホール、一二三、大黒屋等々、それに今でもアサヒの渡辺さんという(小料理屋でもしていたのか)、質屋も何軒かあつて屋号で呼んでたようだ。

山の神の誰それ、ホーゲン山

の(北橋さんの附近)あたりと

か、ちょうどちんや、ブリキやとか、柾やとか桶やの誰々さんとかなつかしい顔まで浮かんでくる。言葉がなまつて長兵衛がチヨンベ、私なんか幸平とはよばずこへい／＼と呼ばれた時代が長かつた。いつだつたか孫の

一人に、おまえとこのじいさんはなあ、小さい時からこへい

お詫びして訂正いたします

渡 辺 ハ ツ エ

独り居になつて温もりある誘い

雪掻きがなくなり元の粗大ゴミ

飽食の子成人病に狙われる

足らずとも福祉国家のありがたさ

石 井 愛 子

人生も洗張りして歯をのし

老い足の健康法の散歩かな

童謡に顔まで子どもになつている

お詫びして訂正いたします

病床に娘の活けくれし水水仙

病床に娘の活けくれし水仙花

下校の児つらゝ刀に切り合える

寒雀撒餅にさつと應えけり

長谷川和子

大島喜恵

仲谷比呂子